

あなたと博物館

松本市立博物館ニュース No.176 2011.9.1

想い出のひと多くみな月の中

松本の地で川柳^{せんりゅう}を作り続け、その活動と功績から、全国の柳人から二目置かれていた
”石曾根民郎^{いしぞね たみろう}”。

生涯をかけて民郎が蒐集した、川柳資料を中心とした膨大な数の資料たち。それを紹介するのが、特別展「石曾根コレクションの世界——95年の生涯を川柳に捧げて——」です。

特別展 石曾根コレクションの世界

— 95年の生涯を川柳に捧げて —

平成23年 10月15日^土 ▶ 11月20日^日

37日間 会期中無休

『川柳しなの』
(昭和22年10月号、66号)
表紙の版画
丸山太郎作「十三夜」



もくじ	誌上博物館 ◇ 「石曾根コレクションの世界」—— 95年の人生を川柳に捧げて ——	2-3
	特別展「松本郷土かるた」	4
	「松本の多様な昆虫～昆虫少年50年のあゆみ～」開催によせて	5
	秋季企画展「松本市の古墳時代——古墳の中の武具・馬具」開催によせて	6
	— 企画展「窪田空穂と早稲田」開催にあたって — 国文学者・教育者としての空穂	7
	ガイドコーナーはんてんぼく	8

特別展「石曽根コレクションの世界」

— 95年の人生を川柳に捧げて —

10月から始まる特別展のテーマは“川柳”です。

松本に生まれ育ち、常に松本とともに在った川柳作家石曽根民郎（1910～2005）。彼の蒐集したコレクションを紹介するのが今回の特別展です。今回の誌上博物館では、コレクションの持ち主、石曽根民郎について紹介いたします。

1 川柳ってどんなもの？

石曽根民郎の話をする前に、川柳について少し述べたいと思います。

最近では、川柳の人気も高まっていて、サラリーマン川柳などを聞いたことがある方も多いのではないのでしょうか。

ところで、「川柳」と「俳句」の違いってご存知ですか？同じ五・七・五で詠まれるので、違いがわからないという方もいるのではないのでしょうか。

大まかにいってしまうと、川柳は人物を詠み込み、俳句は風景を詠み込むものです。人々の心情や恋愛事など、“人間くささ”を楽しむものが川柳といわれています。他にも、俳句の「季語」のようなものは、川柳では必要がないといった違いもあります。

川柳の起源は、平安時代から盛んであった連歌に求められます。連歌は、戦国時代になると、山崎宗鑑の『犬筑波集』に代表される俳諧連歌を生みます。江戸時代になると、俳諧は人気が高まり、全国に広まっていきます。あの井原西鶴も鶴永と名乗って、俳諧を盛んに作っていました。

この俳諧から俳句と川柳が誕生します。松尾芭蕉（1644～94）は、季節や風景を詠み込み、文芸性を高めることで俳句を確立させます。俳句が、芭蕉の活躍もあり庶民にも広まり始めると、俳句の練習法として「前句附」というものが生まれます。出題者から、題として七・七の前句が出されると、その下に五・七・五と附けて句を完成させるというものです（五・七・五の前句に七・七を付けることもあります）。前句附は、俳句の人気と共に広まっていき、前句附の評価を生業にする「前句附点者」も登場します。そのうちに、前句附は俳句から独立していき、人情の機微や恋愛事を題材とし、一つの文芸のジャンルとして確立されます。

かの柄井川柳（1718～90）も、そんな前句附点者の一人でした。川柳の人気はすぐに高まり、当代随一の人気を誇るようになります。その川柳の評価した句を集めて本にしたのが『俳風柳多留』

です。この本によって、川柳の人気はますます高まり、後に前句附が「川柳」と呼ばれるようになったのです。

その後、川柳は全国に広まっていき、近代になると、マンネリ化と改革を繰り返しながら、文芸として発展を続けてきました。

最近では、インターネット川柳やサラリーマン川柳など、時代に即した新しい形の川柳も出始めており、今後の動きも注目されます。

2 石曽根民郎とは？

— 生涯に川柳の壁どんと来い —

これは、石曽根民郎が詠んだ川柳の一句です。石曽根民郎は、まさにこの句のとおり的一生を送った人物です。

明治43年（1910）に、松本市大名町（現・大手3丁目）に生まれた民郎は、中学4年（旧制中学校）の国語の授業で初めて



石曽根民郎

川柳と出会います。授業に出てきた川柳に深い興味をもったと述べています。川柳作家となるきっかけは、20歳の頃に出会った雑誌です。その雑誌とは、大阪の麻生路郎（1888～1965）が発行していた『川柳雑誌』です。路郎は、六大家の一人と言われ、当時の川柳会の中心的人物でした。路郎の著作を偶然購入し、その広告にあった『川柳雑誌』への投句が川柳作家石曽根民郎のスタートとなりました。

路郎の下で川柳を始めたためか、民郎の川柳には、路郎の影響が見受けられます。例えば、民郎は「与えられたいのちのなかに私が詠める限りある川柳を目指したいのである」という言葉を残していますが、これは路郎の「一句を残せ」という教えと共通する部分があるのではないのでしょうか。

民郎は、平成17年（2005）に95歳で亡くなるまで、川柳を作り続けます。まさに、川柳に人生を捧げたという言葉があてはまります。

3 『川柳しなの』

民郎は、ただひたすらに信州松本の地で川柳を作り続けます。「始めた頃には私以外に川柳を作っている人はいなかった」と語っているように、決して川柳の盛んな地ではなかった松本で作句を続け、市民に広めたことは民郎の大きな功績です。



川柳しなの

そんな民郎の功績の中核をなすのが、昭和12年(1937)1月に創刊した『川柳しなの』です。松本ほどの都市で、これほど早い時期から始まり、長く続けられた川柳誌は全国でも珍しく、多くの柳人の評価を受けています。松本の近現代川柳の歴史そのものと言っても過言ではありません。

『川柳しなの』の内容は、民郎の川柳や論文、寄稿された随筆、川柳に関する研究、同人の川柳などです。特に古川柳研究の論稿は、全国各地から寄稿され、研究者にとって貴重な発表場所となっていたそうです。自らや同人が作る川柳と古い時代の川柳の話題が並列し、「伝統をいかに生かし、今日の人たるべきか」という民郎の姿勢が投影されています。

『川柳しなの』を見ていくと、民郎が、ただ自らの探究心のまま川柳に向き合っていたことがわかります。川柳改革に走るでもなく、伝統に帰るだけではなく、ただ「時の流れのまゝに新奇を追はず、今日ある川柳のゆくへに自分の持てる主張と希望を投げ掛けて」川柳を作り続ける。これが『川柳しなの』の根底に流れているものであり、生涯変わらなかった民郎の基本姿勢です。

4 古川柳研究『田舎樽』復刊

民郎は、旺盛な作句活動の傍ら、古川柳研究も熱心に行いました。今回は、そうした研究の中から『田舎樽』について紹介します。『田舎樽』は、文化年間(1804～1817)に松本で刊行された、松本地方では最も古い川柳句集です。十返舎一九が、『田舎樽』の序文を書いています。

民郎は、この本に関する研究を『川柳しなの』の誌上で発表しています。編者や編纂年代の特定といった基礎的研究から、川柳の内容に至るまで、その成果は広範囲に渡ります。

『田舎樽』は全国的に見ても、貴重な句集です。前述したとおり柄井川柳によって確立された川柳

ですが、当初は江戸に限定されていたため、全国への伝播は俳句ほど早くはありませんでした。江戸以外で川柳句集が刊行されるのは、安永9年(1780)に山形で刊行された『田舎ぶり紅島』が最初とされています。地方の句集としては、『田舎樽』の刊行は非常に早い時期になります。

民郎は、古本屋で購入したこの稀書を口語訳して、復刊することも行っています。家業が印刷屋ということも手助けしたのですが、こうした研究成果を社会に還元していったことも民郎の功績と言えます。

5 特別展開催へ向けて

今回、紹介した民郎の功績はほんの一部です。コレクションの中核をなす、川柳関係の資料は、民郎が生きた大正から昭和の資料が中心ですが、江戸時代の古書も含まれており、貴重な資料が多くあります。

特別展では、他にも様々な角度から民郎に迫っていきます。民芸にも造詣が深い民郎は、丸山太郎や棟方志功といった人物と交流していました。また、美術の分野でも中村善策や柳沢健といった作家と交流しています。

川柳の道を究めんと欲して人生のすべてをつぎ込み、そしてその旅の途中で手にしてきた様々な資料を丁寧に保管し、次代に残した民郎。胡桃沢勘内らと同じく、松本の偉人と呼ぶべき人物です。今回の特別展で、より多くの方が「石曾根民郎」と出会い、その人柄と作品に触れていただく機会となれば幸いです。



中村善策 銅版画(『川柳しなの』の表紙や挿絵に使用)

(松本市立博物館学芸員／遠藤正教)

参考文献

- 尾藤三柳編『川柳総合事典』(雄山閣出版株式会社、1984年)
- 尾藤三柳監修、日本川柳ペンクラブ編『現代川柳ハンドブック』(雄山閣出版株式会社、1998年)
- 佐藤美文『川柳文学史』(新葉館出版、2004年)
- 杉山昌善、渡辺美輪『時実新子 川柳の学校』(実業之日本社、2004年)

特別展「松本郷土かるた」

明治39年(1906)から、当時の小学校では子どもたちは郷土・松本について学習するようになりました。「松本郷土かるた」は、子どもたちが遊びながら郷土・松本を学習する教材として、昭和9年(1934)に作られたものです。このかるたには、当時の松本の町の様子、松本ゆかりの人物や年中行事などがたくさん紹介されており、当時の松本を知る貴重な資料と言えます。今回の特別展では、この「松本郷土かるた」を取り上げて紹介します。

まず、松本の町の歴史を読んでいるものを紹介します。

い 今の警察 昔の番所

今の千歳橋のたもとには、江戸時代に松本城大手門と、その番所がありました。明治21年～昭和13年(1888～1938)には警察署がありました。



右が松本警察署、左が松本郵便局と千歳橋(千歳橋南側から・大正時代末の絵葉書より)

ろ 六九五十四 馬屋跡

六九という町名の由来は、松平氏の代に設けられた54疋立ての馬屋があったからだといわれています。

は 花の城山 天保より

天保14年(1843)時の城主戸田光庸は、この景色のよい城山を人民とともに楽しむ場所にしたいといい、お百姓に命じて、松、桜、楓など1000本を植えさせました。

た 田町西町 住宅地

田町は大門沢川の左岸の低湿地で水田だったところに慶安年間(1648～52)水野氏によって武家屋敷が設けられました。西町は、戸田康長が、元和3年(1617)から寛永10年(1633)までの間に安原町の西に武家屋敷を設けたためこの名前がつけました。

現在、千歳橋のたもとには銀行などのオフィスやお店が立ち並んでいます。松本郷土かるたを通して、かつて警察署や馬屋があったという町の歴史の一端をみることができます。それから、城山の桜、田町西町が住宅街であることも今では当たり前ですが、それぞれに歴史があることがわかります。他には、蟻ヶ崎の陸軍墓地(市営墓地)、槍ヶ岳、美ヶ原の王ヶ鼻、正安寺小路、五十連隊の練兵場などが読まれています。

松本ゆかりの人物を読んだものもあります。

に 日本一の小里市長

小里市長は昭和12年(1937)まで連続30年にわたって市長を務めました。このように長期にわたった市長は珍しかったため、国宝市長と呼ばれました。

ま 松本寺は七郎兵衛

戦国時代末、小笠原長時に使っていた神官松本氏は伊勢に逃れ、松坂に住んでいました。後に徳川家康を助けたため、江戸幕府ができて

から、朱印船を許されてベトナム方面との貿易を始めました。そして、ファイボン近くに日本町を建て、その地で松本寺を建てました。

け 傑士 山本貞一郎

大名町出身。松本藩士。尊皇攘夷論に共鳴しました。

これらの読み札のほかに、伊藤軍兵衛、小笠原長時、多田嘉助、辻新次、沢柳政太郎、福島将軍、近藤茂左衛門、古曳盤谷、安藤さき等が登場します。皆さんは何人ご存知ですか?

松本の年中行事も紹介されています。

ほ 梵歌涼し 夏の宵

梵歌とは、江戸時代から松本の城下町で行われた女の子の行事「ぼんぼん」の歌のことです。

え えっさえっさの青山様

昔から、「ぼんぼん、青山様」は、松本の夏の風物詩だったことがわかります。鮎市、八幡様(筑摩神社)や岡の宮のお祭り、千鹿頭の御柱のことも読まれています。

開智学校と現在の松本市立博物館ももちろん登場します。

か 高樓高し 開智校

開智学校の八角形の塔屋。昔から高樓とよばれていました。

れ 歴史の参考 記念館

明治39(1906)年に開智学校内にできた明治三十七、八年戦役記念館のことです。現在の松本市立博物館の前身です。

今回の展示では、複製した「松本郷土かるた」を旧開智学校校舎内に置きます。このかるたを通して、松本の昭和初期の様子や、子どもたちがこのかるたで遊びながら、郷土・松本について学習した様子などに、想いをはせていただければ幸いです。

(旧開智学校学芸員／山村里佳)



特別展「松本郷土かるた」

9月16日(金)～11月30日(水)

「松本の多様な昆虫～昆虫少年50年のあゆみ～」開催によせて



里山辺藤井谷での昆虫採集の様子(昭和41年)

はじめに

自然豊かな松本周辺には、実に多様な昆虫が生息しています。そうした「昆虫王国」の中で、かつて、戦後まもなくの時期からしばらくの間、多くの子どもたちは、遊びとして昆虫採集をしていました。私自身も、子どもの頃は近くの山でカブトムシを探したり、田んぼでタガメを捕まえたりして遊んでいました。それが、昔の子どもたちの楽しみだったのです。そうした「昆虫少年」の中には、大人になってから、研究者として活躍している（いた）人もいます。

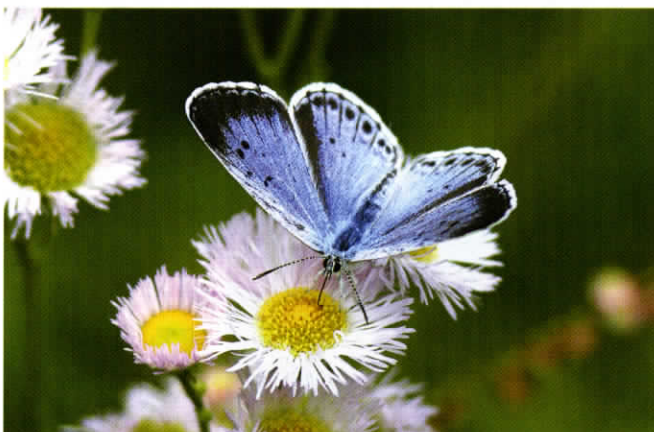
1 採集から研究へ

「昆虫少年」たちは捕らえた虫を標本にし、コレクションにしていました。美しいチョウを並べたり、カブトムシの大きさを競ったりするのが、彼らの大きな楽しみでした。こうしたコレクションを見ても、一人悦に入っていた様子が思い浮かびます。そのうち彼らの中には、そのコレクションの中に探求心をかき立てられた人もいました。捕らえた場所などによるチョウの大きさの違いは何か、コブヤハズカミキリ群の住み分けは何故かなど、彼らが気になった人達は、コレクションから研究対象へとその考え方を変えていったのです。

彼らの研究成果の中には、私たちの生活に関係するものも少なくありません。直接関連する益虫・害虫といったものもちろんそうですが、たとえばチョウの分布一つをとってみても、その変化をたどることによって地球温暖化の影響などを考える指標とすることができるのです。「たかが虫」などとは言わないでください。「虫たちは人間よりもはるかに敏感に、自然の変化を捉えることができるのですよ」そんなことを、昆虫研究者たちは口をそろえて言っているのです。

2 人と虫の「かかわり」

今回の展示では、いくつかの「昆虫少年」たちの研究成果について紹介していますが、その一つについて少し記したいと思います。近年新聞などでも話題になっている紫色が美しいオオルリシジミですが、かつては松本平のいたるところで見られた、ごく普通のチョウでした。しかしその分布域は年々減少していき、現在では安曇野の一部などの限られた場所ではしか目にすることができません。それは自然環境の変化が大きく影響しているからで、チョウの食草であるクララの分布が減少したことが直接的原因なのです。しかし言い換えれば、それは人間の生活様式の変貌によって自然を変えてきたことによるものだ、ということなのです。



オオルリシジミ

3 永遠の昆虫少年

現代に生きる子どもたちをとりまく環境は、自然を含めて大きく変化しつつあります。虫採りをして遊ぶということも、最近ではあまり見られなくなったような気がします。昔、都会の子どもは「虫はデパートで売っている物」という認識だと聞いたことがあります。今では松本あたりでもそのようになってきているのが実態なののでしょうか。

今回の展示では、松本平で昆虫採集・研究に携わってきた「永遠の昆虫少年」にスポットを当てています。子どもの頃から虫を追いかけてきた彼らの成果には、私たちの生活に寄与しているものが少なくないことを知ってもらえれば幸いです。そこにこそ「昆虫少年」のレーゾンデートルがある、というのは言いすぎでしょうか。

(山と自然博物館学芸員／澤柳秀利)

企画展「松本の多様な昆虫」 ～10月30日㊥まで開催

秋季企画展

「松本市の古墳時代—古墳の中の武具・馬具」開催によせて

はじめに

私たちの住む松本市には多くの古墳が存在します。この古墳の中からは装飾品や武具・馬具といった副葬品が豊富に出土しています。考古博物館では、多くの方にこの副葬品をご覧いただくため、2年にわたり「松本市の古墳時代」と題した秋季企画展を計画しました。昨年は「古墳の中の装身具」を中心に展示しましたが、今年は「古墳の中の武具・馬具」に焦点を当てます。

古墳から出土する武具と馬具

古墳から出土する武具とは、冑や鎧などのように、戦時に防御の役割を担う道具のことを言います。松本市で発見された武具では、桜ヶ丘古墳の衝角付冑と短甲が最も代表的な出土品で、平成22年に他の出土品とともに県宝に指定されました。このような武具は、古墳時代の武人の装いを知るために貴重なものです。



桜ヶ丘古墳出土の甲冑

また、馬具は轡、鞍や鎧などのように人間が馬を操作する道具を言います。現在、馬の活躍の場は乗馬や競馬

といったスポーツやレジャーが中心と言えるでしょう。しかし、歴史を遡ると馬は長く兵器としても用いられていたのです。世界史的には、紀元前20世紀頃から遊牧民族が戦争に馬を用いたといわれています。近代になり、戦車が登場するまで馬は戦争の中で大きな役割を果たしました。日本において馬を兵器として利用し始めたのは古墳時代と考えられています。大和政権を主体とする国内の勢力と同盟のあった百済など朝鮮半島南部の勢力との交流の中から馬の兵器としての利用が伝わりました。司馬遼太郎の『坂の上の雲』に登場する秋山好古將軍の話から騎兵を連想される方も多いと思います。馬は今から108年前の日露戦争まで主戦力を補強する強力な兵器であり、騎兵が戦場の花形とされた時代もあります。

武具・馬具は戦いを象徴する道具です。しかし、なぜ古墳の中から武具や馬具が出土するのでしょうか。

中国の歴史書『後漢書東夷伝』には弥生時代の日本の様子が「倭国大いに乱れ」と記述されています。



南方古墳出土の馬具

それを裏付けるように「環濠集落」と呼ばれる、周囲に堀をめぐらせた弥生時代のムラの遺跡が全国で数多く発見されています。弥生時代のムラは「倭国大乱」とも呼ばれる、日本国内の争乱を背景に戦闘性を帯びた構造をしていたのです。

しかし、古墳時代になると環濠集落のような遺跡はほとんど発見されていません。弥生時代に見られる集落の戦闘性が古墳時代になると見られなくなってしまうのです。つまり、弥生時代から古墳時代になり、争乱状態が解消され、社会は一応の安定を見たと考えられるのです。そのような、古墳時代の遺跡である古墳の中から戦いを象徴する武具や馬具が発見されるのはどうしてなのでしょう。

今回の企画展では古墳から出土した武具・馬具を展示するとともに古墳時代の謎にも迫ります。

おわりに

古墳の多くは後世の開発によって消滅してしまったり、墳丘は残っていても盗掘にあったりして、副葬品が散逸してしまうことがあります。しかし、松本市では幸運にも豊富な副葬品を埋蔵していた古墳が発見され、古墳時代の生活や習俗を知るための貴重な資料となっています。考古博物館ではそうした副葬品を数多く収蔵しており、本年の秋季企画展で展示することとなりました。今回の企画展が松本市の古墳時代を知る、そして私たちの祖先が古墳時代にどのような生活をしてたのか、また、どのような社会に暮らしていたのか知っていただけるような機会となれば幸いです。

(考古博物館学芸員／草間厚伸)

秋季企画展「松本市の古墳時代—古墳の中の武具・馬具」

9月17日④～11月20日⑥

—企画展「窪田空穂と早稲田」開催にあたって— 国文学者・教育者としての空穂

松本市和田出身の窪田空穂^{くぼ たうつ ほ}は、我が国を代表する歌人として活躍しただけでなく、国文学者や教育者としても偉大な足跡を残しています。

明治41(1908)年、空穂は『新派短歌評釈・附作法』を刊行しました。この中には「万葉集抜抄」として、万葉集の評釈が載っており、30歳頃より、古典研究にも力を入れてきたことがうかがわれます。初期の古典研究による著作物には、このほか『評釈伊勢物語』『万葉集選』『枕草子評釈』等があり、特にこの3冊の評釈は、伊勢、万葉、枕草子を一般読書界に広める大きな役割を果たしました。また、大正4年に出版された『奈良朝及平安朝文学講座』という著作は、恩師・坪内逍遙の目に留まり、国文学者としての力量が高く評価されました。そして、これが機縁となり、大正9(1920)年、母校早稲田大学文学部国文科に講師として招かれました。

大学で和歌の講座を持った空穂は、「講読は、知っているが故に講じるのではなく、講じるために知るのであって、熟知していないと講じられないものである。一講座2時間で、量としてはわずかであるが、範囲は広いので、私なりに熟知し得たと信じられる下調べをするには、時間を要した。」(『わが文学体験』より)と言っています。大学の教壇に立った空穂は、講義をするには、原典を精密に調査し直す必要があることに気づき、その古典研究は、更に深められました。

こうして下調べをしながら作ったノートが累積され、やがてこれをもとにした評釈や論集等が刊行されます。昭和7年と同8年には『新古今和歌集評釈』上・下2巻、昭和10年と同12年には『古今和歌集評釈』上・下2巻、昭和18年から同27年にかけて『万葉集評釈』全12巻、昭和22年から

24年にかけて『現代語訳源氏物語』全8巻など数十冊の著作が刊行されました。

空穂は、大正15(1926)年には早稲田大学教授となり、昭和22年3月に定年退職するまで勤め上げ、5月には名誉教授となりました。

古典作品の文学的価値を批評しながらの講義は、無駄のない充実した講義として定評があり、多くの学生を引き付けました。また、学識豊かで、人間的魅力に富んだ空穂に魅かれる学生や空穂に師事して短歌を詠む学生も多く、幾多の優れた人材を育成しました。学生の進路指導などにも尽力し、卒業後も身の上相談に応じました。そんな空穂の学生を想う温かい心が感じられる話として、空穂の教えを受けた歌人の武川忠一先生(現・窪田空穂記念館運営委員)は、次のようなエピソードを語っています。

「私は、空穂先生の家で8ヶ月か9ヶ月お世話になりました。戦争で寮が焼けてしまい、食料も困難な時代だったので、大学を休学して田舎へ帰ろうと思い、空穂先生の家にあい拶にいきました。すると、空穂先生と章一郎先生(空穂の長男)が『いなくちゃいけない。俺の家でよかったです。』とおっしゃられ、お世話になることになりました。」(平成19年「窪田空穂をめぐる記念座談会」より)

学問研究に信念を貫き、慈愛の心を持って学生と共にあった空穂の生き方は、多くの教え子の心に刻み付けられました。

窪田空穂記念館では、9月23日(金)から11月27日(日)までの会期で、企画展「窪田空穂と早稲田」を開催します。評釈等の著作物、原稿、日記、書簡、写真等を展示し、空穂の多方面にわたる活躍を紹介します。また、^{あいづ や いち そう ま ぎょうふう}會津八一、相馬御風など親交が深かった早稲田の人々についても併せて紹介し、「芸・学・人を兼ねそなえた先生」と呼ばれた空穂の魅力に迫ります。ぜひご覧ください。多くの皆様のご来館をお待ちしております。

(窪田空穂記念館長／小松源一郎)



早大時代の空穂



万葉集評釈

